

## 世羅町の6次産業化の取り組み(要約)



広島県世羅町産業振興課担い手支援係 係長(当時)  
和泉 美智子

広島県世羅町の和泉と申します。どうぞよろしくお願いたします。

私は平成7年に旧甲山町役場に採用され、産業振興課は8年目になりました。担い手支援係は、新規就農や6次産業支援、町内にある国営の開発農地の管理等のほか、「せら梨」という特産品の農園圃場整備も担当しています。20人の産業振興課ですが、担い手支援係は6人です。200人ほどの役場職員のうち20人を産業部門に配置し、基幹産業である農業に力を入れて頑張っています。

今からご紹介するのは、小さい自治体の事例なので、まだまだだなというところも感じられるかなとは思っています。

人口は、平成16年の合併時は約1万9,000人でしたが、現在年間200人ペースで減っており、1万7,000人を下回りました。世帯数約6,000、高齢化率は約40%です。

昔から水稻を中心に、農業の町として発展してきましたが、山を切り開いて水田以外の畑作農業をやっているということで、国営の農地開発事業が21年の歳月をかけて行われました。357haの山を切り開いた農地で、19の団地に38の農園が入植され、梨やブドウ、リンゴ等の果樹を中心に栽培しています。現在完売状態で、さらに入植したいという問い合わせもあります。

団地を整備した経緯ですが、もともと世羅町では、葉たばこ栽培がさかんでした。たば

### 世羅町の概要

世羅町は標高約350m～500mにある盆地で、278km<sup>2</sup>の小さい町です。農業がさかんで、「世羅高原野菜」として、広島市などに多くの世羅産野菜を出荷しています。広島空港から約30分、無料の高速道路が開通して世羅インターができたこともあり、年間200万人ほどの観光客にお越しいただいております(図1)。

図1 広島県世羅町 2004(平成16)年合併



こは専売公社による買い取りのため、安定的な供給ができていましたが、その後の生産調整のため、たばこ農園をやめる方が多くなりました。こうした状況を受け、平成のひと桁時代には、観光農業への転換が図られるようになりました。例えばある観光農園では、約13haの農地に、春はチューリップ、夏はヒマワリ、秋はダリア、最後に大根を栽培し、年間を通して観光できるように整備したことで、入場料だけで1億円を超える収益を上げていると聞いています。

「世羅幸水農園」という50haの梨農園があります。この幸水農園は経営の取り組みが評価され、平成26年に日本農業賞や農林水産祭の天皇杯を受賞しました。初代組合長の梶川静一さんという方が、梨農園の隣に藤の観光農園を作って、定年を迎えた組合員が観光農園に再就職できる仕組みをつくりました。人間優先の考えで、世羅町の農園では初めて女性部をつくって、福利厚生を充実させました。そうした整備が農業のおもしろみや生きがい対策につながったと言われています。

世羅町には大きな梨園が2つあり、約100haで幸水梨を中心に栽培しています。入植後50年ほど経ち、現在では家族協業経営という形で運営されています。これは、地元の方が9戸～20戸の構成員で協業して経営を行うというものです。全国で初めて、袋をかけない梨の栽培に取り組み、今も大阪の市場では大変評価をいただいています。この梨は、今では台湾にも輸出しています。最近では外国人の方が体験型農業を楽しみに、世羅町を訪れるようになりました。

もう一つの特徴として、集落法人化して、地域で一緒に農地を守っていこうという取り組みがさかんです。現在、地域型の農業集落法人が町内に38あり、数でも面積でも広島県内では1位です。例えば「さわやか田打」と

いう農業集落法人は、地域の62の農家で構成されています。農家が農地を法人に預けて、44.9haの水稲中心の農地を、麦や大豆栽培に変換しています。女性部が加工室を設けて、麦や大豆を使った味噌やお菓子、惣菜の開発をしています。

管内の農業の概況ですが、世羅町の総農家数は現在2,000戸程度、耕地面積は3,350ha、基盤整備率79%です。平成30年から、約400haの圃場整備が始まるので、整備率はさらに上昇すると思います。農業生産額は現在、推計で130億円です。なかでも畜産業がさかんで、採卵鶏（鶏の卵）が畜産の半分を占めています。豚や牛の飼育もしており、その堆肥は野菜や果樹栽培に活用されています。農業外企業も、カゴメをはじめ16の企業が入植しています。

主な農産物の県内シェアですが、ポストレタスは県内1位で、最盛期には国内の4分の1のシェアを占めていました。また、トマトも県内1位で、カゴメにより約8.5haの温室栽培が行われています。大豆が1位、アスパラガスが2位で、梨が1位です。梨は、鳥取の20世紀梨という白梨に対抗して、中国地方で初めて世羅町が赤梨の栽培を始めました。

## 6次産業化の取り組み

6次産業化に取り組む以前には、いくつかの課題もありました。

開発団地では、入植者には造成による負担金を払っていただきますが、経営が苦しくなると、その支払いが滞るようになりました。また、水田農業を営む農家の高齢化により、担い手が不足して耕作放棄地が増える、観光農園はトイレや駐車場などの設備のグレード感が欠けて、お客様からクレームを言われる、リピーターにつながらない、加工品を作っても売り先がないなどの課題がありました。課題解決のために、観光農園と加工グループが

よい関係を築くことが必要でした。

町の農業がこうした壁にぶつかっていた平成9年、広島県が6次産業推進事業というソフト事業を打ち出しました。当時、世羅町に県の農業改良普及センターがあり、その職員と世羅郡内3町の担当者がこの事業を導入し、農産物を加工して付加価値をつけて販売につなげようという取り組みを始めました。平成10年には、3町の担当者とJAと広島県で6次産業推進協議会を発足させました。この推進協議会には、今では観光協会や拠点施設も加入し、農業技術指導所の普及員の方がアドバイザーとして生産に基づく指導をしてくれています。行政の組織である推進協議会の役割は、県や国の補助金を確保することですが、いくら協議会が推進しても、肝心の生産者が動かないといけないので、平成11年には、世羅高原6次産業ネットワークという農家団体をつくりました。

推進協議会では、3町の共通課題である観光客の増加を目指して、3町全体を農業公園と考え、PRも一緒にやることにしました。資材や資源を共有することを考えました。世羅郡として6次産業化に取り組み、中四国関西圏でのモデル地域として育成することで、定住促進のための就業機会の確保と所得増大を目指すというものでした。

また、住民のための魅力的な地域づくりと、暮らしを考えるための推進体制も効果があると考えました。地元の人に地元の産品をもっと愛用してもらうための啓発が重要ではないかということです。観光農園に地元の人が行ってくれば、口コミで広がります。また、町内、郡内の学校や病院で地元の産品が使われているかも調べました。農家だけでなく地域住民が活性化にかかわる体制になっているかといったことについての討議を重ね、ビジョンづくりやネットワーク育成を考えました。

平成10年には「世羅高原6次産業ビジョン」をつくりました。今では当たり前ですが、ご当地ブランド商品をつくったり、わかりやすい道案内をしたり、アンテナショップをつくらうとしました。

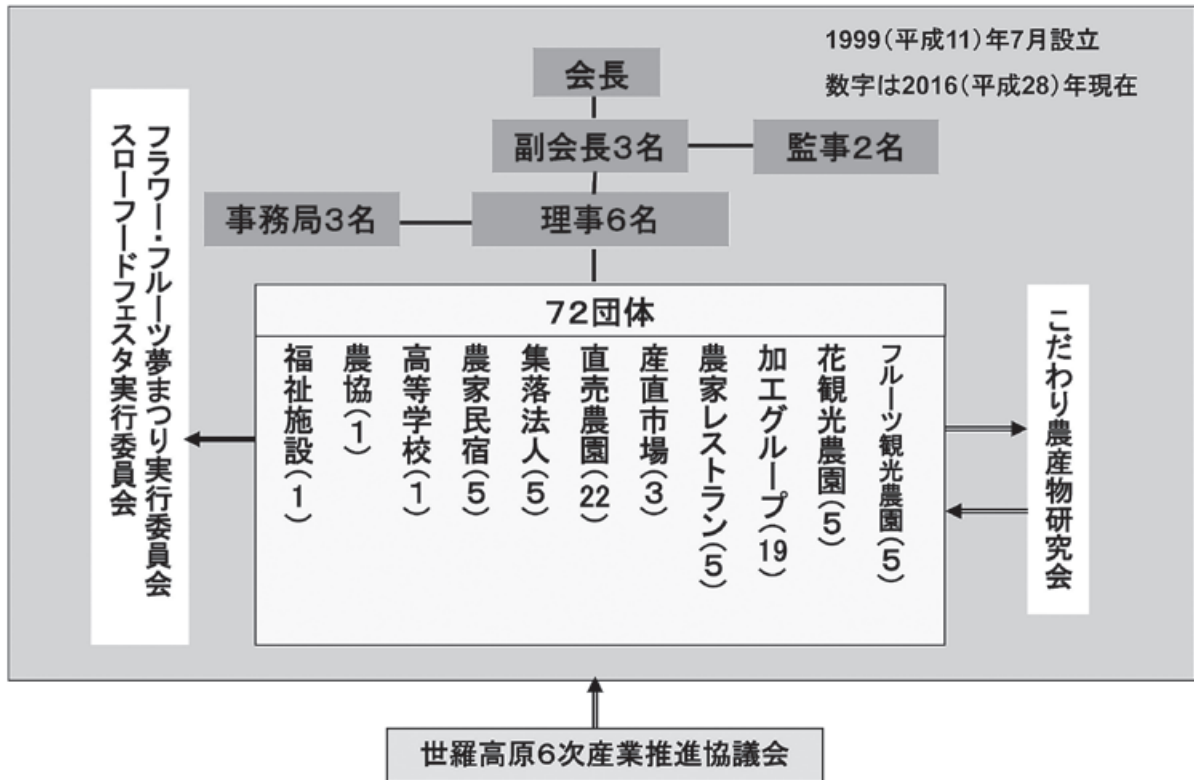
6次産業を推進するためには多額のお金が必要です。そのため推進協議会では、様々な補助金を探して、確保してきました。今は農林中央金庫の「農林水産業みらい基金」を活用し、平成27年～29年の3年で1億3,000万円の支給を受け、新たな取り組みをしています。皆さんも、行政職員としての能力を発揮して、計画や目標数値を作成して、是非地元で補助金を取ってきてください。

平成11年に世羅高原6次産業ネットワーク(以下、「ネットワーク」)をつくりました(図2)。32団体でスタートし、現在は72団体が加入しています。会員は延べ1,400人です。会員の年齢層は高く、女性と男性が半ばずつ加入しているという特徴があります。また、50haの大きな梨園があれば、個人農家もあるということも特徴です。協同組合という形をとっているため、規模にかかわらず、同額を出資して、同じように発言権を得ています。なお、現在ではネットワークも推進協議会の会員です。

ネットワークは農家中心ですが、特別枠を設けて、県立世羅高校とJA尾道市、地元の農産物を使ってパンをつくっている福祉施設も構成員となっています。世羅高校には農業経営科があり、高校の圃場で様々な野菜や果樹を栽培し、加工室で加工して販売もしています。3つの産直市場は、それぞれ400～500人の会員で構成され大変人気があり、1億円～6億円もの売り上げがあります。

このネットワークには、「元気を売ります せら夢高原 元気を買いに せら夢高原」というキャッチフレーズがあります。元気な生産者が元気になれる商品をつくっていますの

図2 世羅高原6次産業ネットワーク



で、元気を買いに世羅へ来てくださいというものです。

ネットワークは、最初6つの部会に分かれて活動を始めました。部会を設けたもくろみは、行政支援から独立してもらうためでもありました。今は、事務仕事やイベント企画をマニュアル化するとともに、部会を3つに集約し、それぞれにマネージャーを3人つけています。

部会の一つである研修情報部会では、農家に縁のなかった3次産業部門を中心に、多くの研修を実施しました。経営力強化のための研修も、今は年に3回ほど開催しています。GAP（農業生産工程管理）の研修も再三やっていますし、最近はトレーサビリティや農薬の使い方に関する研修も実施しています。皆で一緒に研修を受けることはとても大事です。研修の場で農家さんと一緒に統一したブランドイメージをつくることができます。協力することで大きなイベントができ、マスコミに

取り上げられやすくなりました。観光シーズンにはローカル番組で毎日、世羅の観光農園を取り上げてくれます。

生産商品開発部会では、こだわりの農産物をつくろうという研究会を立ち上げています。世羅の気候に合う減農薬の栽培研修です。広島県に農業ジーンバンクという5,000種の原種の種を保存している機関があるのですが、そこから世羅の気候に合う種を提供してもらい、健康によいもの、珍しいもの、おいしいものなど、こだわりの農産物を展示圃でつくっています。

郷土料理部会では、スローフードフェスタを開催しました。お母さんたちがつくった加工品や料理を、1,000円のチケットを買っていただいた200人の方に食べて評価してもらい、よかったものは町内の産直市場に並べています。最近は飲食組合や商工会の人からも参加させてほしいという申し出があるので、一緒に商品開発をしています。



そのほかにネットワーク全体の取り組みとして、広島市内にある「ひろしま夢ぶらざ」というアンテナショップに1ヶ月間出店して、農家のお母さんたちが自ら世羅産品を販売しています。消費者のニーズを把握するのにとってもいい機会ですし、情報発信の場にもなります。

9月には「フルーツ王国夢まつり」というイベントを開催します。2日間で3～4万人のお客様が来られます。梨の皮むき競争やフルーツに関するクイズ、重量をはかるコンテストを行ったりします。この祭りは、平成18年にオープンした「せら夢公園」で開催しています。ここは国営農地開発事業の未開発地で、県と町が買い上げて整備した公園です。

この一角に、6次産業ネットワークの拠点施設「夢高原市場」を平成18年につくりました。ワイナリーやレストランもつくりました。ワイナリーは、世羅町が51%出資して、兵庫県伊丹市の小西酒造とダイナックというレストラン業界の会社を加えた3者で第3セクターをつくっています。

夢高原市場は協同組合という形で運営されています。ネットワークの加入団体である72団体のうち、現在47団体が夢高原市場へ出資しています。ふるさと産品を発送するほか、お母さんたちが日替わりで地産地消の軽食販売をしています。また、ネットワークの皆さんが考えた30程度の体験メニューの開発も行っています。梨狩りやブドウ狩りが人気ですが、最近はヤギの散歩や染め物体験が若い女性に人気です。

## 6次産業化による成果

こうした取り組みの成果として、ネットワークの売り上げは、当初9億円程度でしたが、現在では20億円を超えました。実は「夢高原市場」「せらワイナリー」のオープン時に比べ、

今は客数が激減しています。売り上げは増えたのにお客さんが減ったということは、客単価は上がっているということですが、客数を取り戻す取り組みが必要と考えています。

また、様々なところから、出張販売に来てよとか、一緒に連携開発しませんかなどの声がかかるようになりました。

国際交流もさかんになりました。JICAの研修生が年に6回ぐらい世羅町に来て、役場での研修後、実際に農家さんのところで勉強しています。

入植から50年ほど経った町内の梨の木に、黒星病という病気が発生しています。袋をかけない栽培方法なので病気になりやすく、また木が古くなると病気に勝てないのです。今、黒星病の病害果を摘果する作業を、地元の高校生がやってくれています。おかげで平成28年は病気が激減しました。このように、高校生も協力してくれています。

就農希望の若い人たちが世羅に帰ってきてくれました。彼らは「せらマルシェ」というグループをつくって、飲食組合のメンバーと農商工連携で活動しています。

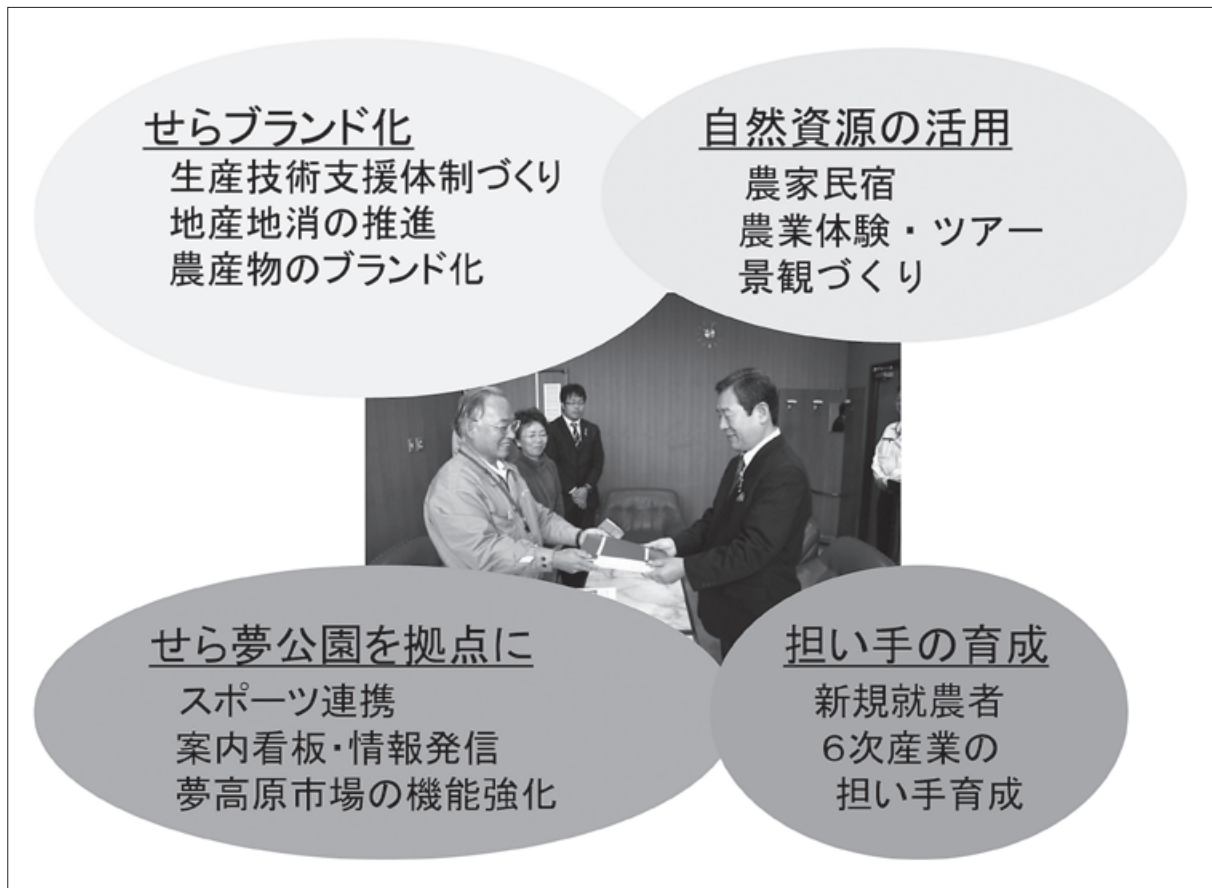
統計から見ていくと、6次産業の取り組み開始以降、1経営体あたりの雇用者数は5.7人と県内1位、農産物販売額も今では約130億円になりました。ショッピング目的で世羅町を訪れる人が5割近くに増えているということには驚きました。

## さらなる発展のための課題

とはいえ、もっと発展していきたいと思っています。若い人に参加してもらいたいし、安全安心な世羅ブランドを確立していきたい。ということで、農家やネットワークの皆さんとワークショップを何回も開いて、新しいプランをつくりました。

そのプランが、4つのテーマと13の事業で

図3 日本一大きく美しく豊かな農村公園プラン



す(図3)。活動体験や農家民宿は、補助金を活用し、専従スタッフをつけて、ネットワークが中心となって取り組んでいます。

農業を主体とした地域の多彩なプレイヤーの連携ということで、商工業者の方たちとの連携を進めています。農家の方が弱いのが、マーケット・イン、ユーザー・インと言われるところです。農家の方は、自分のつくる産品へのこだわりがものすごく強い方が多いです。これはこれで良いことなのですが、これからは消費者目線でのものづくりも必要ということで、売れるものをつくることにも取り組んでいきたいと思っています。

体験プログラムの開発の一つとして、「せら・ヴィな旅」という取り組みも進めています。これは、全国のカメラ女子に世羅町に泊ってもらい、写真の先生を呼んで一緒に写真を撮るといったモニターツアーです。彼女たちは

このツアーをSNSでPRしてくれます。地域のイメージをうまく伝えるのは大事ななと思っています。

今後いろいろな人と連携して、行政も一体となってやっていきたいなと思っています。

著者略歴

和泉 美智子 (いずみ・みちこ)

平成7年広島県甲山町役場入庁。平成16年合併により世羅町となり、環境整備課を経て、平成21年産業振興課に配属。平成27年産業振興課担い手支援係係長。平成29年世羅町福祉課高齢者支援係に異動。